

平和文化研究 第36-37集 (2016年度)

山端庸介の水道管破裂の写真の撮影場所について

李 桓

長崎総合科学大学

長崎平和文化研究所

山端庸介の水道管破裂の写真の撮影場所について

李 桓

概要

この論文は写真家山端庸介が 1945 年 8 月 10 日、長崎で撮影した原爆後の写真のうち、水道管破裂の写真の撮影場所について考察したものである。

目次

1. はじめに
2. 考察
3. 銭座町の原爆の前と後
4. 終わりに

1. はじめに

長崎の原爆後、市内の被曝の様子を最初にカメラに記録したのは山端庸介であるとされる。撮影日は原爆が投下された翌日の 1945 年 8 月 10 日の早朝から夕方までで、正確な枚数はわかっていないが、判明されたのは百枚余りである。これだけの枚数の写真を撮ったカメラマンは、広島、長崎を通して後にも先にもいない、という⁽¹⁾。山端の 8・10 長崎の写真はすでに写真集、写真展、ポスター、ホームページなどの形で公開された。うち、おにぎりを持った親子やラッキー・ガールや乳を上げる母親などの写真は平和を訴えるポスターなどにもよく使われ、大変有名になっている。

百枚余りのうち、水道管が破裂し水を吹き上げる一コマがある（図 1）。橋を渡る男女二人と、爆風で斜めになっている 1 本の木がシルエットとなって画面を構成し、吹き上がる水や飛沫らしきものが背景となっている。飛沫の背後の影ははっきり

りと内容が判断できないが、山の影のようにでも見える。建物や電柱や山の稜線などのようなものが映り込んでいないため、この写真が撮られた場所の確認が難しい。これまでに写真集や山端写真を紹介する書物などはこの写真を掲載しているが、場所についての説明は明確ではない。山端のホームページなどには井樋の口町（現宝町）付近としているが、当時の井樋の口町の地形の特徴からみると、写真にあるような短い橋や山の陰あるアングルが得られにくい。筆者はこの写真の撮影場所について検討の余地があると考え、調べることにした。本稿は、この写真に記録されている場所について、他の資料を用いて考察するものである。

撮影場所を明確にすることにより、写真に撮られた内容をより正確に理解することができ、また、山端の歩いた足跡、原爆による被害状況、さらに、戦前・戦後の町の変容などへの理解にもつながると考える。



井樋ノ口橋、8月10日午前（撮影：山端庸介）

山
端
庸
介



図1 山端の写真（引用：『原爆を撮った男たち』）

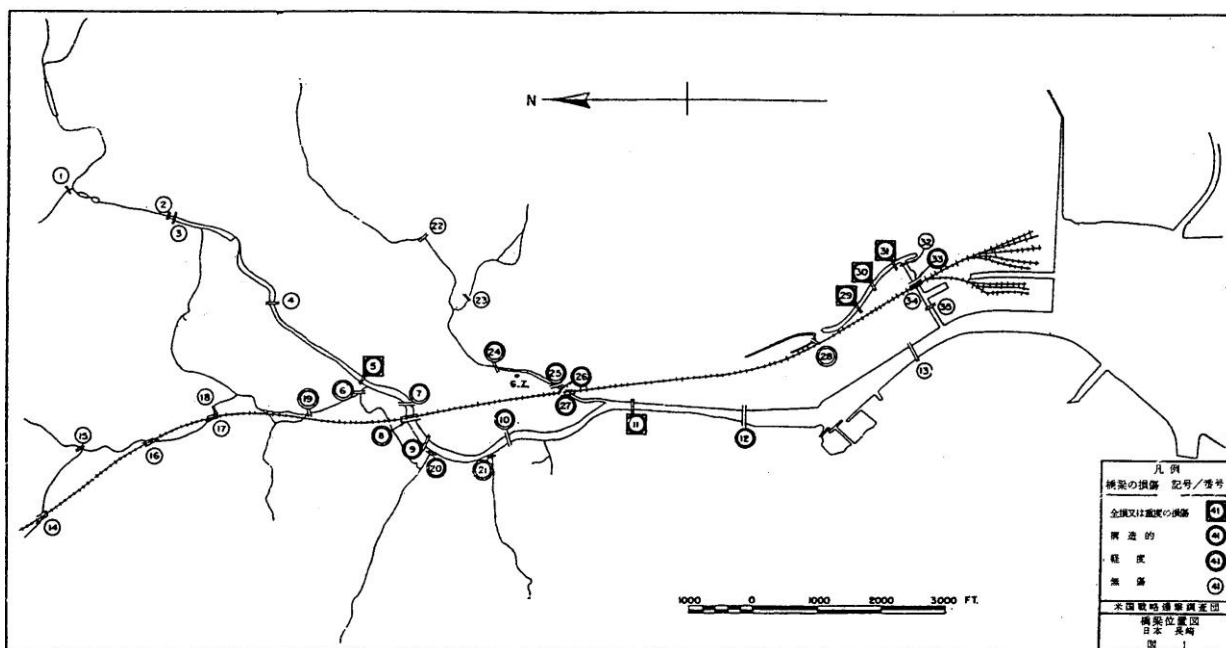


図2 米軍が調査した橋（引用：『米国戦略爆撃団調査報告書』）



図3 小川虎彦の写真（引用：小川虎彦手作りアルバム、県立図書館所蔵）



図4 山端の写真の模写（左）と小川写真の中央部の模写（右）

2. 考察

筆者はこの写真の場所を調べるために、2つの方法を用いた。一つは橋の欄干の特徴から、橋の記録資料から探し出し、所在位置を特定しようと試みた。アメリカ戦略爆撃団が原子爆弾の効果を調べるために、建造物などについて物理的なダメージを詳細に調べた。うち、爆心地から長崎駅付近までの橋についても調べ、浦上川やその上流である下川や宝町一帯の人工造成地の川（運河）に架けられた橋が記録されている⁽²⁾（図2）。しかし、米軍が調査した橋の情報には、山端の写真にあるような橋は見当たらない。したがって、この写真の橋は米軍調査の範囲の外にあると推測することに至る。

もう一つの方法は、長崎の原爆を記録した既存の写真から、山端のこの一コマに記録されている橋もしくは木を探し出すことである。既存の写真は、現在原爆資料館がかなりの枚数を収蔵している。筆者は原爆資料館の協力を得て、収蔵写真台帳を閲覧させていただき、また、長崎平和推進協会写真資料調査部に足を運び、写真アルバムを閲覧した。そこで、長崎の写真家小川虎彦が撮影した銭座町の写真（図3）から、形が酷似する木を見出すことができた。

小川虎彦という人物についての情報は少ない。分かっている情報としては、被爆当時、長崎市桜町（現市役所付近）で写真館を営み、県の依頼で内務省に提出する写真を1945年8月20日から9月末まで被爆写真を撮った。小川の写真は多くの資料に採用され、またその手作りのアルバムは図書館などに収蔵されている。氏はその後も長年、長崎復興の写真を撮り続け、貴重な記録を残している。没後、その写真は遺族によって原爆資料館に寄贈された。筆者は氏の生前の足跡を調べようと試みたが、有力な情報が得られず、知る人もあまりいないため、作業が行き詰まっている。

小川の図3の写真は、本人が「銭座変電所」と手作りアルバムに書き入れており、銭座変電所を

示すことが目的にあると伺える。実際、この写真は銭座町の広い範囲を捉えており、変電所は写真中央あたりの奥に小さく写っているだけである。手前には倒壊した家屋や機械の残骸のようなものが散らかっており、画面中央やや左側にある5、6本の送電鉄塔が目立っている。鉄塔の左側に立っている平屋建ての建物は銭座小学校のグランド側にあった倉庫である。写真の中央に小さく写っている一本の木は山端の写真にあった木と同一のものではないかと筆者が突き止めている。小川の写真は遠くから見ているため、木は非常に小さくしか写されておらず、画面の主要構成ではない。あるいは、偶然捉えられたのかもしれない。しかし、木の形、枝の形状からは、山端の写真の木と同一のものであることがわかる。木の幹の左側にある建物の残骸は山端の写真にも写されている。小川の写真の近景には残骸が広がっているため、橋の欄干はほぼ遮られてしまっている。しかし、欄干柱の頭部が少し見え、その形は山端の写真にあるものと一致である。小川の写真の撮影時期は、原爆後の8月20日から9月30日とされている。山端の8月10日のものと比べると、葉っぱは残っておらず、全て枯れ落ちた状態となっている（図4）。木の種類は写真からは判断しにくいだが、葉っぱの形から、筆者には柳のように見える。木の種類はともかくとして、8月や9月はまだ落葉の時期ではないため、葉っぱがはげたのは原爆によるものだと考えられる。小川の写真では銭座変電所はこの木の後方あたりの位置に見える。

両者の比較がしやすいように、筆者は小川の写真の中央部だけ模写して、山端の写真の模写と並べて示す（図4）。両者はアングルの違いや落葉の有無以外に、幹の形は大きく変わっていない。

3. 銭座町の原爆の前と後

『原爆被災地復元図』⁽³⁾からは、原爆以前の銭座町の建物と道路の分布状況を読むことができる（図5）。そこで、米軍による空撮写真を参考に、



図5 原爆以前の銭座町一部のマップ（引用：『原爆被災地復元図』）



図6 長崎復興計画図（一部）（引用：「長崎復興都市計画図」県立図書館蔵）

筆者は鉄塔の大体の位置を復元図の中に付け加えた。図の中、点線で示している丸い部分は、山端の撮影した木の場所ではないかと筆者が推測する。印した場所（主に下方側）には当時、川があったことが米軍の空撮写真から見ることができる。

長崎の戦後復興において、宝町一带にあった運河が埋め立てられて国道となり、銭座町一带の道路も拡張され、小川は復興工事の中で埋め立てられたのではないかと推測する。図6の中で点線に囲まれたところは銭座町の銭座小学校のあるあたりで、木と橋のあった場所は赤点で記している辺りであろうと考える。その場所はちょうど道路の拡張の範囲に入っているため、木も橋も工事に伴い撤去されたと考えられる。現在、その場所には過去の痕跡

は全く残っていない。

4. 終わりに

以上は、山端庸介が撮影した8・10長崎写真の中、銭座町に関連する一コマについて、他の資料を用いて、その場所の所在と戦前戦後の変化を考察した。

山端はその日、長崎における撮影はほぼ県道に沿って北上しながら行われたと考えられるが、現地の状況に応じて、県道から離れて、被写体に接近して撮影を行った。銭座町で撮影したこの一枚は、おそらく井樋ノ口町あたりに来た時、銭座町の方に水道管が噴水状態にあることに気づき、県道から離れ、そこに近づき、この迫力ある一枚を

収めたのであろう。本考察を通して、過去の資料にあった「井樋ノ口町」というような注釈（例えば図 1）は、「銭座町」とした方がより事実に近いではないかと考える。

この場所から遠くないところには聖徳寺があり、その付近には井樋ノ口現地救護本部が設けられていたが文献からわかる。山端の一連の写真の中に、「炊き出しのおにぎり」や、「おにぎりの配給を受けた親子」（これは大変有名な写真）などの写真はこの救護所本部で撮ったとされるが、これらの撮影は銭座町の写真とは時間的に近いと考える。

山端の銭座町の写真には葉っぱが一部分残っているが、爆風で右側に傾いている勢いが見える。その後の小川の写真には、葉っぱは全て残っていないことが確認された。

この写真に記録された場所は、戦後復興において、道路拡張工事によって改変され、現在その面影を見ることができない。写真の場所はもう現存していないが、写真に記録されている木と人間と橋のシルエットはシンボルとなり、原爆の惨状を伝え続けるのである。

この研究は科学研究費（課題番号 26360090）を受けている。長崎原爆資料館、長崎平和推進協会写真資料調査部に感謝の意を表す。

注および参考文献：

- （1）NHK 取材班、長崎 よみがえる原爆写真、日本放送出版協会、1995.8、pp.42
- （2）米国戦略爆撃調査報告書、長崎国際文化会館、平成 8 年、pp.438-466
- （3）長崎市長崎国際文化会館、原爆被災復元調査事業報告書（別冊）、原爆被曝地復元図、昭和 55 年